娘帰る

咲　恵水

登場人物

新田喜一郎　新田家の長男・新田商会社長
新田和子　新田家の長女・小学校教師
新田孝美　喜一郎の後妻
入江はるか　清子（新田家の次女）の娘
須賀保　孝美の恋人・青年センター職員
駒井秀樹　新田商会の職人
木村知子　和子の担任クラスの生徒の母
新田昭子　喜一郎・和子・清子の母

七月の終り。革製品の製造業を営む新田商会の家。一階は店舗で、太鼓・革の鞄や財布などを展示している。小さなテーブル・椅子・棚がある。階段を上がった先は住居になっているらしい。店舗の奥には台所、店舗の裏には作業場があるらしい。

1

孝美、テーブルに向かい椅子に座っている。週刊誌を読んでいるが、手元の携帯電話をしょっちゅう見ている。周りを気にしながら返信する。
二階のほうから、太鼓の音が聞こえる。強かったり弱かったり、止まったり続いたりしている。
孝美、太鼓の音を無視している。
喜一郎、外から店に入ってくる。偽ブランドのセカンドバッグを持っている。
孝美、携帯電話を置く。

喜一郎　あぁ、あっつ。たまらんわ。
孝美　おかえり。（と、立ち上がる）
喜一郎　これで八月なったらどうなんねん。異常な暑さや。なんもなかったか。
孝美　うん。あ、センターから電話あった。
喜一郎　なんやて。（と、セカンドバッグをテーブルに置く）
孝美　太鼓、修理に持ってくるて言うてた。
喜一郎　どこの太鼓。
孝美　え。あ、エン……エン……。
喜一郎　円寿荘（エンジュソウ）か。
孝美　あ、それ。それや、たぶん。
喜一郎　あぁ、先代が作ったやつや。小さいわ。
孝美　ふーん。
喜一郎　新しいのん、売り込んだるわ。こんなでかいのん。
孝美　そんなん買うてくれんの。
喜一郎　円寿荘は役所から補助出るがな。金、ようさんとれる。
孝美　あの子は。
喜一郎　アンブラッセ行った。
孝美　そうなん。
喜一郎　朝、メシ食わんかったやろ。昼も、あべのに寄ったのに。こんなちょっとしか、ハナクソしか食べんと。今なって、腹減った、パン欲しい言うて。
孝美　ふーん。
喜一郎　きままやねん。わがまま娘、清子そっくりや。
孝美　お茶入れる。
喜一郎　ええで。おまえはあんまり動かんでええから。
孝美　大丈夫や、これぐらい。
喜一郎　まだ安定期ちゃうやろが。
孝美　そうやけど。
喜一郎　お茶でもなんでも、俺やるから。な、座っとれ。
孝美　ほんでも。買い物もあんまし行かへんし。家ん中おったら、息つまるわ。
喜一郎　散歩したらええがな。長橋公園、後で行こ。俺もついてくわ。
孝美　ええわ。
喜一郎　大事にせなあかんやろが。俺も四六やし、もう最後の子やろ。おまえはまだ若いけど。
孝美　若ない。おばはんや。
喜一郎　大事な跡取りやからなぁ。（と、孝美のお腹を触る）なんや膨らんどらんから、ほんまに中おるんか、わからんわ。
孝美　銀行、行くの。
喜一郎　給料日か、忘れとった。おろしてこんとな。
孝美　融資の。今日も電話かかったけど。返済の。
喜一郎　おまえは心配せんでええ言うてるやろっ。俺が行くから。

はるか、外から店に入ってくる。ビニール袋を持っている。

はるか　ただいまぁ。
喜一郎　あぁ、おかえり。買うてきたんか。
はるか　はい。牛乳も買ってきました。
喜一郎　牛乳、なんでや。
はるか　朝、なくなってたから、ついでに。
喜一郎　はるかちゃん、えらい気ぃ利くやんかぁ。ありがとうなぁ。
はるか　（牛乳をビニール袋から出して）冷蔵庫に……。

孝美、はるかから牛乳を取って、台所に入っていく。

はるか　……なんか悪いこと。
喜一郎　あぁ、気にせんでええ。これやから。気ぃ立ってるんや。ほっといたらええ。
はるか　はい……。
喜一郎　お父さん、なんばで仕事て、なんの仕事やろ。
はるか　すいません。途中で抜けて。
喜一郎　ええねんで、仕事やから仕方ないわ。骨は納めたし、それはええねんけど。
はるか　はい。
喜一郎　いや、昨日は飲むばっかりでな。仕事のこと、よう聞いてかったんや。お父さん、なにやってるて。
はるか　アイティ系の会社を経営してる……って、言えって言われてます。
喜一郎　会社やってんの、すごいなぁ。従業員、なん人いてんの。
はるか　開発は、三人ぐらい。営業も兼ねて。
喜一郎　三人も。
はるか　あと二人ぐらいメンバーがおるみたいです。他の会社もやってる人、かな。
喜一郎　五人はいてるてことか。偉いがな。
はるか　そうですか。
喜一郎　五人に給料払うてんねんで。俺ら、職人と孝美と、三人や従業員。
はるか　でも、こんなすごいお店とかないし。
喜一郎　これは俺が建てたんちゃうから。ひいじいさんか、もっと上、ようわからん。なんしか、古い先祖が建てたんや。俺らそれ食いつぶしてるだけやがな。
はるか　でも、老舗ですよね。昨日、日本で、ここしか作られへん太鼓があるて。
喜一郎　あれは、ちょうかっこよう言うただけや。まあ、ほんまやけどな。
はるか　はい。
喜一郎　実際なぁ、太鼓も、注文少ななってな。親会社はええけど、俺ら子会社は厳しいわ。
はるか　リーマンショック以降、とかですか。
喜一郎　よう知ってるなぁ。さすが頭ええ子は違う。
はるか　それぐらいは。
喜一郎　そんなんよりな、ずーっと前から、ここらはあかん。世の中が景気良うても悪うても、関係ないんや。ほんまは、はるかちゃん、うちに来てもうたらええねんけどな。
はるか　……。
喜一郎　孝美の子、生まれたら、ここの跡取りやろ。
はるか　はい。
喜一郎　兄弟おらんし。いとこは、あんただけやからな。
はるか　あぁ、はい。
喜一郎　一族は大切にせんとなぁ。ここにおってほしいけど。まあ、あのお父さん、景気ええみたいやし。血ぃつながってなくても、大事にしてくれるからええわ。心配してない。
はるか　……。
喜一郎　高校は、あれか。東京の、受験すんのか。お父さんについて行くんやろ。
はるか　……考え中です。

駒井、作業場から店に入ってくる。汚れた作業着を着て、黒い瓶を持っている。

はるか、鼻と口を押さえる。

駒井　大将ー、帰ってはったんですかぁ。すんません。
喜一郎　なんや。
駒井　脳みそ水、なくなってもうたんですけど。（と、瓶を指す）
喜一郎　こっち持ってくんな。お嬢ちゃん、おんねんから。
駒井　あぁ、すんません。ごめんねぇ、臭いなぁ。

はるか　いえ。
駒井　在庫ありますか。
喜一郎　もうない。あれ、タヌキのんあるやろ。
駒井　作るんですかぁ。
喜一郎　作れや。
駒井　はーい。
喜一郎　おまえ、いっつも返事はええけど。なめし何回やってんねん。ようほぐしてるか。
駒井　やってます。まだ二回目ですよ。
喜一郎　次で三回目やろが。何年、職人やってんねん。一回で決めんかい。
駒井　はーい。
喜一郎　ほんま、わかっとんのか。
駒井　すんませーん。ほな。
喜一郎　あぁ、駒井。おまえ行くよな。
駒井　はい。
喜一郎　ハワイ。
駒井　行きますよぉ。
喜一郎　それやったらええわ。
はるか　（瓶に注目しながら）それ……。
喜一郎　寄ったあかん。
はるか　脳みそ、なんですか。
駒井　見る。（と、瓶をはるかに見せて、匂いをかがせる）
はるか　……なっ。（と、鼻を押さえて、逃げる）
喜一郎　（駒井の頭を小突く）なにしとんねん。
駒井　せっかくやし。一回ぐらい見といてもええかな思うて。
喜一郎　さっさと、仕事せえ。
駒井　はーい。どうもー。（と、はるかにお辞儀する）
喜一郎　よう湯、沸かして。塗りすぎはあかんぞー。節約せえよ。
駒井　はーい。

駒井、作業場に入っていく。

喜一郎　大丈夫か。
はるか　……駒井さんの服も……なんか匂い。
喜一郎　作業着に、脳みそ染み付いてんねん。
はるか　なんの脳みそ、ですか。
喜一郎　牛とか豚……まあいろいろや。
はるか　タヌキも。
喜一郎　二週間前な、淀川のとこに、タヌキおって。弱っとったから、捕ってきたんや。
はるか　はあ。
喜一郎　皮はいで、なめすんは、プロやったら一回でええ具合にほぐすんやけど。あいつまだ下手やから、何回もやってからに。脳みそ水はな、冷凍してる脳みそを解凍して、ミキサーでつぶしてな。家のミキサーちゃうで。それ専用のがちゃんとあるから。
はるか　はい。
喜一郎　ちょっとだけ水入れて、鍋であっためて。皮に塗りこむ用の水にするんや。皮にこう塗って。……気持ち悪いか。
はるか　……はい。
喜一郎　それが俺らの仕事や。
はるか　あ、すいません。
喜一郎　ええねん。だれかてやりたないわな。……臭いし、汚いし。……皮て字、なめしたら、違う革になるん知ってるか。
はるか　皮が皮。
喜一郎　あれや、皮膚のひ、の皮を、なめして、革命のかく、の革になる。
はるか　……あぁ。あ、変わるんですか。皮から革に。それ、なめす。
喜一郎　そう言うて、社会見学するガキに教えるんやけどな。
はるか　はい。
喜一郎　清子は、これが嫌で出て行ったようなもんや。匂いが服に染み付く言うて、嫌がっとった。あいつ、きれい好きやったやろ。
はるか　洗濯は、好きでした。
喜一郎　出て行ってから、一回も戻ってこんかった。よっぽど嫌やってんやろ。

二階のほうから、太鼓の音が聞こえる。

はるか　……また鳴ってますね。
喜一郎　（上を見て）……たいした用ないねんけど。暇やから呼ぶんや。ちょう見てくるわ。
はるか　おばあちゃん、大丈夫なんですか。

喜一郎　大丈夫やで。
はるか　私まだ、顔見てないんですけど。
喜一郎　見る必要ない。はるかちゃんが心配することちゃうからなぁ。俺らがちゃんと面倒見る。死ぬまでな。
はるか　……はい。
喜一郎　お父さん、何時に迎えに来るんや。
はるか　あ、時間は。そんな遅くにはならんと思います。
喜一郎　ほな、それまでゆっくりしいや。

喜一郎、二階に向かっていく。
はるか、椅子に座る。テーブルの上に、ビニール袋からパンとコーヒー缶を取り出す。コーヒーを飲み一息つく。周りを気にしながら、孝美の携帯電話を手に取り、画面をずっと見ている。パンを口に入れる。
須賀、外から店に入ってくる。大きなダンボール箱を持っている。
はるか、すぐに携帯電話を置く。

須賀　こんにちはぁ。
はるか　……こ、こんにちは。
須賀　はるかちゃんやね。（と、ダンボール箱を置く）
はるか　……はい。
須賀　ここ初めてやて。よう来たねぇ。
はるか　……なんで、私のこと。
須賀　あぁ、ごめん、ごめん。僕ね、青年センターの、須賀保言います。よろしく。
はるか　……入江はるかです。
須賀　入江さん言うんや。昨日ね、清子さんの娘さんが帰ってきたて、みんな言うてたんよ。
はるか　はぁ。
須賀　清子さんの納骨は行った。
はるか　はい。
須賀　びっくりしたでしょう。
はるか　……はい。
須賀　このへんの人間はね、ああやって、大穴に骨を投げるんよ。投げ込み言うてね。変わってるやろ。

間。

はるか　あ、おじさん、上に。呼んできます。
須賀　あ。奥さんは、いてるかな。
はるか　え。
須賀　孝美さん。
はるか　あぁ、はい。
須賀　ごめんねぇ。

はるか、台所に入っていく。
須賀、孝美の携帯電話を手に取る。
孝美、小走りで台所から店に入ってくる。後ろから、はるか、入ってくる。

孝美　遅かったやん。午前中言うてたのに。
須賀　いろいろ準備、時間かかってもうて。（と、はるかを気にする）
孝美　（はるかを気にしながら）それですか。
須賀　そうです。円寿荘の、おじいちゃん、おばあちゃん用の、矯正の靴。（と、ダンボール箱を開けて見せる）
孝美　太鼓ちゃうの。
須賀　え、靴。靴て言うたよね。
孝美　え。
須賀　だから、ちょうど靴が来たから。
孝美　アタシ、太鼓て言うたけど。
須賀　あぁ。……まあ、別に。大丈夫や。
孝美　……まあいいか。
須賀　これ。（と、携帯電話を差し出す）
孝美　あ。（と、携帯電話を受け取る）
須賀　気ぃつけんと。
孝美　はい。

間。

孝美　はるかちゃん、悪いけどなぁ。買い物、行ってきてくれる。
はるか　あ、はい。なに。
孝美　野菜。

はるか　なんの野菜ですか。
孝美　キャベツとたまねぎ。
はるか　はい。
孝美　お願い。
はるか　……それだけですか。
孝美　……あと、にんじんも。
はるか　どれぐらい、何本。
孝美　適当でええよ。
はるか　はい。
孝美　ちょう待って。（と、棚の引き出しを見てお金を探す）
須賀　はやし、わかるかな。
はるか　え。
須賀　スーパーはやし。
はるか　玉出。
須賀　そこは玉出。はやしのほうが安いから。
はるか　あぁ、はい。
孝美　とりあえず。（と、はるかにお金を渡す）
はるか　（お金を受け取って）はい。
孝美　はやしは、ここまっすぐ行って、玉出を越えて。二つ目の大きい通りの角、右曲がったらあるから。
はるか　商店街まで行くんですか。
孝美　商店街までは行けへん、手前や。風呂屋の前。
はるか　……わかりました。（テーブルの上の、パンやコーヒーを片付けようとする）
孝美　ええよ、おいといて。これだけ。（と、コーヒーを手渡す）いってらっしゃい。
はるか　（コーヒーを受け取り）いってきます。

はるか、外に出ていく。
孝美、須賀、はるかを見送る。

須賀　荷物、まとめた。
孝美　うん。
須賀　チケット。（と、ポケットから切符を出して、孝美に手渡す）待ち合わせでけへんから、直接、席まで行ってな。
孝美　（チケットを受け取りながら）大丈夫やろか。
須賀　なにが。
孝美　逃げても。バレて、追いかけてきて。すぐ連れ戻されんのちゃう。
須賀　僕らの行き先、だれが知ってんの。だれにも言わんかったらバレへん。
孝美　（お腹に手を置く）
須賀　あの喜一郎さんや。バレたら、僕らだけちゃう。この子も殺されるで。
孝美　……。
須賀　自分の父親、殺した人やで。
孝美　あれは自殺や。
須賀　そう言うてんの、喜一郎さんだけやろ。みんな恐いから黙ってるだけや。警察も怪しい思うてる。
孝美　証拠もないのに。
須賀　火のないところに煙は立たん、言うやろ。新田の家は警察からずっとマークされてんねん。あの、同盟の鬼言われた、センター長でも気ぃ遣うねんで。……今、そういうこと言うてるんちゃう。僕が、孝美ちゃんのこと守るから。
孝美　保くん。
須賀　大丈夫やて。
孝美　たこ焼き器、持って行っていい。
須賀　え。
孝美　やっぱり道具とか、使い慣れたん、持って行きたいやん。（と、ビニール袋に、パンをしまう）
須賀　そんなん、どこでも売ってるやろ。
孝美　あの、たこ焼き器は、ウチが実家から持ってきたやつやもん。他のはええけど。あれは持って行きたいねん。
須賀　……好きにしたら。

2
木村、外から店に入ってくる。
孝美、須賀から離れる。

孝美　いらっしゃいませ。
木村　……。
孝美　……こんにちはぁ。

木村　新田和子さん、いらっしゃいますか。
孝美　あ……すいません。まだ学校から帰ってないんですけど。
木村　夏休みやのに、学校行ってるんですか。
孝美　今日はクラブとか言うて。すいません、私もよう知らんのですけど。なんかご用ですか。
木村　ほんまにいてないんですか。（と、奥を覗き見る）
孝美　いてませんよ。どちらさんですか。
木村　……。
須賀　木村さん、お久しぶりです。
孝美　知ってんの。
須賀　こないだ引っ越してきはった。ねぇ、第三住宅でしたっけ。もう慣れましたぁ。
木村　……。
須賀　覚えてませんか。青年センターの須賀です。補助金のことで、お話ししましたよねぇ。
木村　あぁ。
須賀　そうそう。お久しぶりです。
孝美　木村さんて。
須賀　和子さんとこのクラスに、子供さんが転校したんよ。三年二組やろ。
孝美　あ、すいません、父兄の方て、知らんと。どうぞ座ってください。
木村　結構です。
須賀　どうしたんですか、木村さん。こわい顔して。美人が台無しですわ。
孝美　お茶、持ってきます。
須賀　ねぇ、座ってください。木村さん。

孝美、ビニール袋と週刊誌を持って、台所に入っていく。
須賀、木村を椅子に促す。

木村　……和子さんに話あるんですけど。
須賀　子供さんのことですか。男の子でしたよね。どうしました。
木村　子供のことじゃないです。
須賀　そうやね、非行に走るんにはまだ早いか、小三やし。なんかありました。遠慮なく言うてください。僕らも先生と一緒に、いつも問題を解決してるんですよ。ここは昔から、みんなで団結してきたんです。なにがあったんですか。
木村　……。
須賀　先生は学校のクラスだけやけどね。僕らは生活全部を見てます。……言いにくいんは、ようわかってます。民族のことは特にそうです。理解してもらわれへん。そやけどね、僕らも一生懸命やってるんですわ。そやからここでは、みんな平等なんです。みんな同じように住宅に入れるようなった。僕らの先輩が一生懸命に運動。
木村　なんの話ですか。
須賀　なんのて。住宅でなんかあったんちゃうんですか。嫌がらせされたとか、なんか言われたとか。
木村　なんも言われてません。
須賀　それやったらいいですけど。いやね、住宅内で、そういうトラブル、ようあるんです。
木村　どういうトラブルですか。
須賀　扉に落書きされたり。あれ、ユダヤの星言うんか、ようわからん印書いて。小学生のガキはまだかわいい。中学生は、壁一面に落書きするからねぇ、タチ悪いですわ。
木村　落書きもされてませんけど。
須賀　ゴミは大丈夫ですか。
木村　ゴミ。
須賀　家の前に、ゴミ捨てられるんですよ。まあ、それは最初のうち、すぐ飽きるから。あ、言うん忘れてましたけど、下のポストに本名は書かんほうがいいですよ。いたずらされるみたいやから。郵便物取られたりねぇ。
木村　ゴミも捨てられてませんし。郵便物も届いてます。
須賀　あぁ。ほんなら、どうしました。なんか新しいのん、ありましたか。
木村　……。
須賀　いろいろあると思いますけど。なんでも言うてください。センターでね、統計とってるんですよ。落書きとかも、いちいち数えて報告せなあかんので、結構めんどくさいんですわ。
木村　うちの子が泣いて帰ってきました。
須藤　え。
木村　お祭に、行かれへん言うて。
須賀　あぁ。
木村　今月も。来月も、九月のんも。お祭の回覧、回ってきてません。
須賀　そうなってますね。
木村　クラスの子、みんな行く言うてんのに。うちの子だけ除け者です。

須賀　そりゃ、仕方ないですわ。
木村　なんで仕方ないんですか。
須賀　民族の違いはありますからね。
木村　ここは、みんな平等、区別ない町違うんですか。
須賀　そうですよ。そやけど、祭は違うでしょう。身内のもんやから。

孝美、台所から店に入ってくる。お盆に麦茶を載せている。

孝美　（お盆をテーブルに置き、木村に麦茶を差し出す）どうぞ。
木村　……。
孝美　暑いから、どうぞ。飲んでください。（と、須賀に麦茶を差し出す）
須賀　いただきます。（と、麦茶を取る）
孝美　ここの家のもんも、祭は行かれへんのです。
木村　……え。
須賀　孝、奥さん。
孝美　ここで、祭の太鼓、作ってるんですよ。そやけど祭には参加でけへん。
木村　おかしいでしょ。
須賀　……おかしいですね。
孝美　部外者に、あんまりそういうこと言わんほうがええ。
木村　嫁に来るまでは、行けたんやけどね。
孝美　……。
木村　お母ちゃんが縫うてくれた浴衣も、いっこも着られへんくなってもうたんです。
孝美　……浴衣、縫えるんですか。
木村　縫えますよ。ウチのお母ちゃん、洋裁も和裁もできたから。目、悪なってからはやめたけど。
孝美　すごいですね。
木村　貧乏やから、買われへんかっただけと思いますけどね。生地も、いつの時代のんかわからんぐらい色変わって。ずっと縫い直して使うんです。
孝美　大切にして、いいんじゃないですか。
木村　まあね、エコやし。
孝美　浴衣の作り方、教えてもらいはったら。
木村　そりゃ無理。お母ちゃん、去年死んでもうたから。

喜一郎、二階から店に入ってくる。ネグリジェとタオルを持っている。

喜一郎　いらっしゃい。須賀くん。
須賀　こんにちはぁ。
喜一郎　太鼓の修理やて。修理はもちろんするけどなぁ。もっとでかい太鼓、いらんかなぁ。うちで作らせてもうたら、百年は持つでぇ。
孝美　ごめん、私の聞き間違いやねん。
喜一郎　えぇ。
孝美　太鼓じゃなくて靴。
喜一郎　靴。（と、ネグリジェとタオルを孝美に手渡しながら）上、おしめ、ない。
孝美　はい。（と、ネグリジェとタオルを受け取り、台所に入っていく）
須賀　すんません、喜一郎さん。円寿荘の矯正の靴なんです。
喜一郎　矯正のんは、うちちゃう。市大病院のんやろが。
須賀　そうなんです。そやけど、そっち経由で頼んだら、えらい高うなります。
喜一郎　昔からそやろ。医療機関が入らなあかんて、うちも散々断られた。
須賀　そうなんですけど。今、経費もなるべく落としたいんで。内緒で、喜一郎さんに作ってもらわれへんですか。
喜一郎　裏でか。
須賀　すんません。センター長からも連絡いくと思いますけど。とりあえず、これ、渡しときます。
喜一郎　（ダンボール箱の靴を手に取って見ながら）できんことはないけど。うちの技術は日本一やからなぁ。
須賀　はい。作れますよね、そっくりのん。
喜一郎　内緒はまずいよなぁ。須賀くん。
須賀　はい。
喜一郎　バレたとき、パクられるんはこっちや。そこはどう考えてくれてるんかなぁ、谷川さんは。
須賀　……言うときます。
喜一郎　いや、固い話やなくて。うちもなぁ。親会社の新田産業さんには、頭上がらんのや。
須賀　はい。
喜一郎　あそこはええで。なに言うても、天皇さんの式典の太鼓、作っとんのやからな。同じ新田言うのにやで、うちの新田商会は下請け。もともと親戚のはずや。偉そうにしやがって。絞り取られるんは、いっつもこっちやがな。

須賀　たいへんですよね。わかります。
喜一郎　やるかぎり、メリットないとなぁ。……来年、平成二十三年は、六十年の大祭やなぁ。
須賀　はい。
喜一郎　記念の年や。太鼓、うちに任せてくれへんかなぁ。
須賀　それは……。
喜一郎　宮太鼓やなくても、鼓でもええわ。なんとかなるやろ、なぁ。小さいガキ、五十人ぐらい踊らす。あんとき使う小さいんでもええし。それぐらい、なんとでもなるやろが。

孝美、台所から店に入ってくる。麦茶を持っている。

須賀　センター長には言うときますけど。約束はできませ。
喜一郎　言うてくれるか。そうか、悪いな、須賀くん。嬉しいわぁ。そや、今日、焼肉行こか。モーモークラブ、よっちゃんとこ、改装したんやて。行ったらなあかんやろ。行こや、暑いときは肉食うて、精つけなあかん。
須賀　今日はちょっと。すんません。
喜一郎　あかんのか。
須賀　すんません。今度、また。
喜一郎　俺と須賀くんの仲やから、いつでもええわ。
孝美　（喜一郎に麦茶を手渡す）こちら。
喜一郎　（麦茶を受け取りながら、木村を見る）あぁ、お待たせしました。どちらさんでしたか。
孝美　和子さんのクラスの、父兄の。
喜一郎　あぁ、そうですかぁ。どうも。新田です。和子がえらいお世話なってます。
木村　木村です。
喜一郎　わざわざ来てくれはって。和子は。
孝美　メールした。すぐ帰るて。
喜一郎　もう帰るそうです。ちょっと待っといてくださいなぁ。
須賀　木村さんは六月に引っ越してきたんです。
喜一郎　あぁ。
須賀　第三住宅のほうに入ったんです。
喜一郎　住宅。あぁ、そうですかぁ。そりゃ、ええわ。木村さん、なるほどねぇ。どっから来ましたん。
木村　兵庫です。
喜一郎　あぁ、そう。ここら、住みやすいでっしゃろ。ものは安い、家賃も安い。あんたらは、補助も出るからええわなぁ。
須賀　そんな軽う言わんといてください。僕らが勝ち取ったんですから。
喜一郎　あぁそうか、すまん。勝ち取ったんは、俺らのじいさんやけどな。あれ、風呂ないんは困るけど。第三やったら風呂屋、近いやろ、ねぇ。
木村　……。
喜一郎　この新田の家は、このあたりのまとめ役、ずっとやってるんですわ。困ったことあったら、なんでも言うてくれたらええ。遠慮したらあきませんで。なぁ、須賀くん。
須賀　さっきも言うてたんですよ。
喜一郎　あ、これ、孝美ですわ。今、これで、三月三日が予定日。ひなまつりですわ。
木村　妊娠してはるんですか。
孝美　はい。
木村　……おめでとうございます。お大事に。
孝美　ありがとうございます。
喜一郎　子供さん、本名でええよ。
木村　え。
喜一郎　カミングアウト言うんか。なあ、須賀くん。
須賀　ここは他と違いますから。本名の子、多いですよ。なんも気にしません。クラスでカミングアウトしたら、えらい盛り上がりますよぉ。
木村　そんな気ありません。
喜一郎　浅慮せんと。
木村　結構です。和子さんにも、そう言うてますから。
喜一郎　さっきから、気になっとってんけどなぁ。あんた、ことば遣いなってないんと違う。ガキが和子に世話なってんねやろ。和子さんは、おかしいんちゃうんか。先生、やろ。こっちが黙っとったら、ええ気なったら困るで。
木村　……ええ気て、どういう意味ですか。
喜一郎　須賀くん。どう思う。おまえ、大学出やからわかるよなぁ。
須賀　そうですねぇ。普通は、先生ですね。
喜一郎　あんたらの国はどうか知らんけど。先生に向かって偉そうになぁ。
木村　先生やったら、先生らしいこと、したらどうなんですか。
喜一郎　なに。
木村　先生は、ものを教える人のことです。勉強だけじゃない。道徳、道理

も教えるん違うんですか。和子さんに、資格あるんですか。
喜一郎　ケンカ売っとんのか。
木村　泥棒ですよ。
喜一郎　はぁ。
木村　懇談会の後に、うちの人、野球部の特別監督やれへんかって誘われたんです。和子さんが顧問で。練習、練習って、毎日遅くまで。おかしい思うてたら。
喜一郎　あぁ……浮気。なんや、そうかいな。それはそれは、お気の毒に。
木村　うちの人は、ちょっと魔がさしたんです。和子さんに言うてください。
喜一郎　そら男はそう言うわ。ほんでも、一回ちゃうんやろ。
木村　迷惑です。なんの恨みあって。
喜一郎　恨みはない。強いて言えば理由はあんたや。男は、ええ女おったら、手出さずにはおられんもんやからな。なぁ、須賀くん。
須賀　いやあ。
喜一郎　（須賀の頭を小突いて）はい、やろが。
須賀　はい。
喜一郎　あんたがしっかりなぁ、色気あったら、和子にいかんやろ。無理やろけど。
孝美　言い過ぎちゃうの。
喜一郎　おまえは黙っとれ。
孝美　和ちゃん、前も同じことやってるやんか。
喜一郎　（孝美の頭をつかみ）黙れ言うてんの、わからんのか。おまえは、黙って子供産んどけっ。（と、頭をつき放す）
木村　やめてくださいよっ。奥さん、妊娠してるんでしょう。乱暴なことやめてください。
喜一郎　どこが乱暴やねん。家族の話に、口出さんとってくれるか。

3

和子、小走りで外から店に入ってくる。スポーツバッグを持っている。

和子　……こんにちは。木村さん。
木村　……。
喜一郎　こちら。おまえのクラスの人やてなぁ。
和子　そうや。
喜一郎　なんか疑ってるらしいで、おまえのこと。こちらの旦那さんと、おまえが浮気してる言うて。
和子　……。
喜一郎　ほんまか。
和子　浮気はしてない。本気や。
喜一郎、和子の頬を叩き、殴りかかる。
須賀、喜一郎を止める。
喜一郎　なに考えてんねん。ええ加減にせえよっ。
須賀　（喜一郎の体を止めながら）ちょ、ちょっと、喜一郎さん。
喜一郎　どんだけ俺らに迷惑かけんねん、ええっ、こらっ。おまえは最低やっ。ぽっとん便所か、おまえはっ。
須賀　やめてくださいって。
孝美　大丈夫。（と、和子の肩を抱く）
和子　（頬を押さえながら）……なんて言うてました、あの人。
喜一郎　おまえ、どう思うてんねん。
須賀　落ち着いてください。話し合いましょう。
喜一郎　離せっ、こらっ。（と、須賀を振り払おうともがく）
須賀　話し合い。ちょっと、もう。（と、喜一郎を押さえている）
喜一郎　話し合いもクソもあるかっ。性根、叩き直さなあかんのや、こいつはっ。
木村　別れるて言うてました。
和子　そうですかぁ。
木村　別れてください。
和子　あの人に言うてください。
木村　あんた、学校の先生でしょ。こんなことしていいと思ってるんですか。
和子　迷惑でした、私。
木村　あたりまえでしょう。
和子　いい刺激なったんちゃいますか。セックス復活したでしょ。よかったやないですか。
木村　……。
和子　どうしたいんですか。殴ってもいいですよ。それとも、指つめたらいいですかねぇ。
木村　（和子の頬を叩く）私らの家族。邪魔せんといてください。

和子　怒るんやったら、ちゃんと捕まえとってください。男は、すぐよそ見するんやから。セックス以外、なんもつなぐもんないんは、お互いの責任ですよね。
木村　直接言うてくれます。うちの人に。（と、携帯電話を取り出す）……はっきり言うてください、別れるて。
和子　いいですよ。
木村　（電話をかける）……もしもし。今、新田先生の家におるんやけど。先生と代わるわ。（和子に携帯電話を手渡す）
和子　（携帯電話を受け取り）……もしもし。……もう終わりやから。さようなら。……切っていいですか。
木村　はい。
和子　（携帯電話を切り、木村に手渡す）おしまいです。……私、学校、辞めるんです。
木村　え。
喜一郎　そんなん聞いてないぞっ。
和子　新学期から、二組には新しい担任が来ます。安心してください。
木村　……二度と、うちの人にちょっかい出さんとってください。
和子　もう会いません。
木村　……お邪魔しました。……お茶、どうも。
孝美　……どうも。
和子　一成くん、野球、続けてくださいね。……あの子、才能あるから。
木村　……。
和子　すみませんでした。（と、木村に頭を下げる）

木村、店から出ていく。

喜一郎　もうええがな、放せ。
須藤　あぁ、はい。（と、喜一郎を放す）
喜一郎　家まで来るて。あの女もたいがいやな。脅しに来たんか思うたわ。
和子　痛かったわぁ。
喜一郎　我慢せえや。俺があそこまでせな、しめしつかんやろ。そやから見てみ、さっさと帰ったやんけ。おまえ、まさか本気やないやろな。
和子　あほな。メールありがとう。
孝美　うん。
和子　須賀くん、なんでここにおるん。
須賀　え、あぁ。あの靴を。
喜一郎　ええ仕事持ってきてくれたんや。なぁ。
須賀　はぁ。
和子　ふーん。
孝美　和ちゃん。先生、辞めるて、ほんま。
和子　ほんまや。
孝美　辞めて、どうすんの。
喜一郎　あのおばはんに言うただけやて。辞めるわけないやろが。
和子　お兄ちゃん、相変わらずのんきやな。
喜一郎　なに。
和子　清子が出て行ったときも。気づいてなかったんは、お兄ちゃんだけやったなぁ。
喜一郎　なんの話や。

昭子、二階から店に入ってくる。ネグリジェを着ている。

喜一郎　うろうろすな。（と、昭子に近寄る）
和子　体、拭いてほしいんちゃうの。
喜一郎　さっき拭いたがな。
和子　あ、そう。おしめは。
喜一郎　換えたて。はい、行こう、な。（と、昭子の肩を抱く）
昭子　（喜一郎を避けて）……ないてる。
喜一郎　はいはい、わかったわかった。
昭子　牛、は……親と離されて、育てられた。上等な草を、食べさせ、られて。きれいな、水を、飲まされ。いい空気、を吸って……。
喜一郎　ええからもう。（と、昭子を無理やり連れて行こうとする）
昭子　いやっ、いややーっ。やーーーっ。（と、喜一郎から逃げて、和子にすがりつく）
和子　ええやん。牛の物語やな、お母ちゃん。牛おったなぁ。牛はどうしたんかな。
昭子　……牛は、大きく、なって。まるまる太って。食べられる。
和子　食べられるねんなぁ。そうかぁ。
昭子　食べられる。食べられるのに、理由はない。……赤い血が、流れて。身が裂かれて。骨が砕かれる。……目から血の涙が出る。だれも、助ける、ことが、できない。理由は、ない。

和子　かわいそうやなぁ。
昭子　夢に、出てくる。牛は、バケモノに、なった。大きな角、大きな爪。目玉は飛び出て、口は裂けた。……牛がなくと、槍が降る…槍が降る。槍は、心臓を、突き刺す。
喜一郎　……やめさせや。
昭子　突き刺す……。心臓を突き刺して。槍が目を突く。
喜一郎　もうええっ、やめろや。（と、昭子をつかむ）
昭子　やめぇーーー。槍は私を……突き刺す。心臓も、目も。
和子　お兄ちゃん、やめや。（と、昭子を喜一郎から離す）
昭子　牛は、皮を剥かれて。……許してください。許してください……。ハナコ……。
和子　大丈夫、大丈夫や。牛の話、終わりやな。お疲れさんやな。（と、昭子を抱きしめる）
喜一郎　銀行、行ってくるわ。（と、セカンドバッグを持つ）
孝美　うん。
喜一郎　これ（と、ダンボール箱を指して）駒井に預けといてくれや。
須賀　はい。
昭子　許して、ください。皮も…頭も。許してください。
喜一郎　……俺が殺したんちゃうやろが。

喜一郎、外へ出ていく。

孝美　……悪いけど、これ、奥に。（と、ダンボール箱を指す）
須賀　あぁ、はいはい。

須賀、ダンボール箱を持って、作業場に入っていく。

和子　心配せんでええよ。
孝美　え。
和子　ウチがお母ちゃん置いて、出て行くわけないやん。
孝美　……うん。
和子　こんなんでも、親は親やからな。
孝美　辞めたんは。
和子　それはほんま。
孝美　もったいない。和ちゃん、すごい頭いいのに。
和子　もともと向いてなかってん。……孝美ちゃんは、いつ行くの。
孝美　え。
和子　あれと、できてんねやろ。
孝美　……違うよ。
和子　あんた、ほんま嘘つかれへんな。うちの家族と大違いや。
孝美　和ちゃん……。
和子　だれにも言うてないから。あんたには感謝してる。あのあほのお兄ちゃんの後妻なってくれて。だれがあんなん嫁になりたい思う。金積まれてもいらんわ。
孝美　ウチは。
和子　あ、ごめん。そういう意味ちゃうけど。三年もよう辛抱してくれました。なぁ、お母ちゃん。よかったよな、お兄ちゃん、古い嫁さんに逃げられけど、若い嫁さんが来てくれて。ええ夢見れて、よかったがな。意外と一途やからなぁ、ゴリラみたいな顔して。
孝美　ゴリラ。
和子　似てるやろ。
孝美　うん。
和子　はい、お母ちゃん。そろそろ行こか。ゆっくりな。（と、昭子を促す）
昭子　牛の、涙が、流れる。流れる……星。星が流れる。
和子　そうやな。牛の涙はきれいなぁ。
孝美　喜一郎さんにはすごい感謝してます。お母ちゃんを最後まで、病院で治療さしてくれて。ほんまに。
和子　当然やろ。あんたも家族やねんから。
孝美　喜一郎さんの苦労も、ようわかりました。一人で、この家背負うて。借金もようけあんのに、一人で全部。ちょっとでもなんかでけへんかて思うたけど。
昭子　それと、好きなるんは別やもん。あの、頼りない男の、どこがええんかわからんけどぉ。
孝美　すいません。
昭子　男の女のことは、当人しかわからん。……その子、お兄ちゃんの子とちゃうやんな。
孝美　……。
和子　それやったら、なんも問題ない。いつでも行ったらええよ。

和子、昭子を支えながら、二階に向かっていく。

孝美、立ち尽くしている。
須賀、作業場から店に入ってくる。

須賀　……どうしたん。
孝美　……うん。
須賀　喜一郎さん、おらんうちに。荷物まとめて移動しよ。新大阪で、時間つぶせるやろ。
孝美　なんで、さっき。
須賀　え。
孝美　木村さんのこと、あんな言うの。
須賀　あんなて、どんな。
孝美　祭になんで出られへんの。
須賀　そんなこと。今、どうでもええやん。早う準備して。
孝美　なんで。おかしいやん。
須賀　おかしいのは、それだけちゃう。ここのやつは、みんなおかしい。
孝美　……。
須賀　もう考えんでいいって。こっから出たら、関係なくなるねんから。
孝美　ここを出たら、祭に出られるん。
須賀　出られるやろ。もう戻るつもりないけど。
孝美　……。
須賀　孝美ちゃん。しゃんとして。はよ先、出て。俺もすぐ行くから。

はるか、外から店に入ってくる。野菜が入ったスーパーの袋を持っている。

はるか　ただいまぁ。
孝美　……おかえり。ありがとう。
はるか　あ、お釣りです。（と、孝美にお金を手渡す）
孝美　（お金を受け取りながら）はやし、わかった。
はるか　はい。意外と近かったです。
孝美　そうやろ。
はるか　（スポーツバッグを見て）和子さん、帰りはったんですか。
孝美　さっきな。（と、テーブルの上のお茶を片付け始める）
須賀　……ほんな。僕、これで。なんかあったら、連絡してください。
孝美　……。
須賀　ほんな、はるかちゃん。
はるか　はい。
須賀　また……あ、はるかちゃんは、ここに戻ってくるんかな。
はるか　え。
須賀　おばあちゃんも、おっちゃんもおるし。
はるか　あぁ……。
孝美　行くんやったら東京や。お父さんの仕事あるしな。
須賀　あ、東京。ええなぁ。景気もええし。毎日、楽しそうや。毎日が祭やろなぁ。
はるか　……。
須賀　ほんなね。

須賀、孝美に目配せして、外に出ていく。
はるか、二人を見ている。

孝美　さっきのパン、食べる。
はるか　……はい。
孝美　コーヒー、冷たいのんでいい。
はるか　あ、はい。

孝美、お盆に麦茶を載せて、台所に入っていく。

4

はるか、スーパーの袋を置く。和子のスポーツバッグを見る。中を開けて漁る。中から赤いチェックの紙袋を取り出して、バッグに戻す。避妊具を取り出して、バッグに戻す。布を巻いたものを取り出す。布をゆっくりと取ると、包丁が出てくる。すぐに、布を巻き、バッグの中に戻す。バッグをしばらく見ている。孝美、お盆とおしめの袋を持って、台所から店に入ってくる。パンとコーヒーをお盆に載せている。テーブルにパンとコーヒーを置き、椅子に座る。

はるか　……ありがとう。

はるか、コーヒーを飲み、パンを食べる。

間。

孝美　カレーしよか思うたけど。肉なかった。
はるか　あ、また行って。
孝美　ええよ、もう。
はるか　……。
孝美　カレーになんの肉入れる。牛、豚。
はるか　鶏肉です。
孝美　チキンか。はるかちゃん、料理する。清子さんおらんくなったから、やらなあかんか。
はるか　料理は前からやってます。お母さん、あんまり作れへんから。だいたい私が作ってました。
孝美　へー。えらいなぁ。
はるか　適当です。
孝美　そや、家事は適当が一番や。まじめにやっとったら気い狂う。……清子さん、お母さん、ガンてわかってから、どれぐらいで死んだん。
はるか　五か月ぐらいです。
孝美　早かったんや。
はるか　若いから、それだけ進むんも早かったみたいです。
孝美　お母さん、いくつ。三十……。
はるか　三十です。
孝美　お父さんは。
はるか　同い年です。
孝美　え、下ちゃうかった。
はるか　あ……二十九です。たぶん。
孝美　ウチと同じや。はるかちゃんが十五やろ。ということは、清子さんは……ウチが中学ぐらいのとき、出て行ったんかな。……あ、ごめんな。ウチ、清子さんのこと、あんまし覚えてないねん。ずっと気になっとってんけど。
はるか　はい。
孝美　はるかちゃん、平成何年生まれ。
はるか　七年。
孝美　あー、やっぱ若いわ。昭和五十六年やもん。昭和やで、知らんやろ。
はるか　はい。
孝美　清子さん、出て行ったときに……。あ、同い年て、ほんまのお父さんのことか。
はるか　はい。
孝美　そっか、ごめん。
はるか　出て行ったときに、お腹におったんは、私じゃないです。お兄ちゃんやったらしいです。
孝美　そうなん。
はるか　お母さん、昔、占いの人に言われたて、言うてました。男の子は生まれへん、女の子なら生まれるって。当たってますよね。

二階のほうから、太鼓の音が聞こえる。

はるか　……。
孝美　はるかちゃん、かわいいから、お母さんも美人やったんやろな。和ちゃんに似てる。
はるか　あ、ちょっとだけ、目元とか似てるかも。
孝美　やっぱり。似てるんや。ゴリラのおっちゃんには似てなくてよかったな。
はるか　ゴリラ。
孝美　そっくりやろ。
はるか　はい。
孝美　はっはっ。ゴリラやて。
はるか　私、お母さんのこと、あんまり覚えてないんです。
孝美　えぇ。
はるか　お母さんと一緒にいる時間、あんまりなかったから。
孝美　そうなん。でも、おったやろ、ちょっとは。
はるか　小さい頃からずっと。お父さんと一緒に家におったから。お母さんが外に働きに行って。……学校から帰っても、お母さんの仕事行く時間やし。お母さんが帰ったら、私、寝てるか、学校に行くし。
孝美　あぁ……そう。お父さんは、家におったん。
はるか　学者やったから。
孝美　えぇっ、頭いいやん。なんの学者。
はるか　国文学……みたいです。
孝美　すごい。はるかちゃん、お父さんに似てんな。
はるか　……たぶん。
孝美　お母さんも偉いよな。再婚して、三年言うてたっけ。
はるか　はい。
孝美　それまで、女手一つで、はるかちゃんを育てたんやもん。一人で育て

るて偉いわ。
はるか　よくそう言われますけど。一緒にいる時間が少なくて。あんまり。
孝美　お母さんやもん。はるかちゃんのこと考えてる時間はだれよりも多いで。
はるか　そうですか。
孝美　そりゃそうや。ウチ、子供とか赤ちゃんて、めっちゃ嫌いやってんけどな。
はるか　はい。
孝美　電車で泣く子供とかおるやん。めっちゃ首絞めたいーて。
はるか　わかります。
孝美　絶対、子供なんかいらん思うてたんやけど。自分の子供できてみたら。まだ、こんな小さいねんけど。なんか、他の子と違うやろなて、ちょっとだけわかった。
はるか　……孝美さんはいい人ですね。
孝美　ええ人ちゃうけど。やっぱり、自分の子供ができな、わからんねやろな。

駒井、作業場から店に入ってくる。作業着ではなく、普通の服に着替えている。

駒井　大将はー。
孝美　銀行。
駒井　そうですかぁ。靴、棚に並べときましたぁ。
孝美　ありがとう。
駒井　ほんな今日はこれで。
孝美　駒井君、ハワイ、行くの。
駒井　行きますよぉ。さっき、大将にも聞かれましたわ。
孝美　大将、あんたのこと好きやから。
駒井　えー、やめてくださいよ。僕も好きですけどねぇ。そろそろ給料、ちゃんと払うてもらいたいです。
孝美　そこか。
駒井　そこですよぉ。正直、きついですわ。
孝美　……ごめん。
駒井　孝美さんに頭下げられても、困りますけど。……新田産業さんには断ったけど。いつでも来てくれ言われてるんです。
孝美　……もし今月も、未払いやったら。
駒井　あんまり、考えたないですけどね。失礼しますぅ。……またねぇ。勉強、がんばりやぁ。
はるか　はい。

駒井、出ていこうとする。

孝美　ちょう待って。（と、駒井に声をかけて、棚の引き出しからお金を出す）……これ。（と、駒井にお金を握らせる）
駒井　え、いいですよ。
孝美　いいて。
駒井　え、孝美さん困るんやないですか。大将にまた。
孝美　大丈夫。黙っといたらわからんから。言うたらあかんで。
駒井　……はい。（と、お金をポケットに入れる）すんません。
孝美　お疲れ。

駒井、外に出ていく。

はるか　……ハワイ、みんなで行きはるんですか。
孝美　来月も、九月も祭あるんやけど。九月のんは一年で一番大きい祭でな、観光客もわりと来るねん。
はるか　へぇ。
孝美　この家のもんは、祭に行かれへんねん。
はるか　え。
孝美　祭の太鼓は作るけど。晴れの舞台を見られへん。
はるか　見たいですよね。
孝美　そやろ。そやから、その時期に毎年どっか旅行行くねん。今年はハワイや。
はるか　なんで祭、行かれへんのですか。
孝美　昔からそうなんやろな。
はるか　……聞いていいですか。
孝美　なに。
はるか　穴に、骨を入れるんは、なんでですか。
孝美　……。
はるか　普通、骨って、壺に入れてお墓に入れますよね。なんで、あんな大きい穴に、ぽーんて投げて。それで終わりって。戒名もないし。なんか。

孝美　墓、作ってもらわれへんから。
はるか　え。
孝美　このあたりの人みんな、あの大穴に、先祖代々の骨が埋まってんねん。
投げ込み、言うんよ。
はるか　それは聞きました。
孝美　それだけや。
はるか　だから……なんでなんですか。
孝美　ウチも知らん。昔からそうなんやから。

二階のほうから、和子の声が聞こえる。

和子　孝美ちゃーーーん。ちょっとぉーーー。
孝美　はあーーーい。
和子　おしめ、持ってきてぇーーー。
孝美　はあーーーい。あほや。持って行こう思うてたのに、忘れてた。
はるか　孝美さんは、ここから出て行くんですか。
孝美　……。
はるか　出て行きたいんですか。
孝美　……清子さんも、出て行ったな。
はるか　追い出された、言うてました。
孝美　……あの斎場の棺桶、ランクあるんよ。上、中、下て。どれがいいと思う。
はるか　どれでもいいんじゃないですか。
孝美　一番下のランクで、だれが焼かれると思う。
はるか　……さあ。
孝美　ウチ、下、やろなぁ。

孝美、おしめの袋を持って、二階に向かっていく。
はるか、座ったまま動かない。和子のスポーツバッグを見ている。
和子、二階から店に入ってくる。

和子　……あれ、帰ってきとったん。
はるか　はい。はやし、行ってきました。
和子　あ、そう。
はるか　おばあちゃんは。
和子　あぁ、大丈夫。孝美ちゃんが、おしめ換えてくれてるわ。（と、スポーツバッグを引き寄せて、椅子に座る）
はるか　おばあちゃんと。会わせてもらえないですか。
和子　会いたいん。
はるか　はい。おじさんは、あかん言うたんですけど。聞きたいことあるんです。
和子　いいけど。まともに話、でけへんと思うよ。
はるか　いいです。
和子　……今、興奮してるから。ちょっとだけ待ってくれる。
はるか　はい。
和子　今日、帰るんやんな。お父さんは。
はるか　仕事でなんばに寄ってます。もうちょっとしたら、たぶん。
和子　あ、そう。……お父さんと、うまいこといってんの。
はるか　……。
和子　あ、ごめん。よけいなお世話やな。
はるよ　和子さんは、あんまり先生らしくないって思うたけど。やっぱり先生ですね。
和子　職業病や。ごめん、ごめん。
はるか　子供、堕ろしたんです。
和子　え。
はるか　お母さん、入院してたとき。お父さんの子供、堕ろしました。
和子　……そう。
はるか　お金は、お父さんが出してくれました。
和子　あたりまえやな。
はるか　はい。

間。

はるか　嘘です。
和子　え。
はるか　嘘ですよ。
和子　ほんまに。
はるか　すぐ騙される。
和子　……なんや。
はるか　びっくりしました。

和子　びっくりしたわ。
はるか　和子さんやったら、これぐらい平気かな思うて。
和子　あー、びっくりした。

和子、スポーツバッグの中を見る。中から、赤いチェックの袋を取り出す。

和子　はい。（と、袋をはるかに手渡す）
はるか　（袋を受け取り）なんですか。
和子　あげる。プレゼント。
はるか　え……ありがとう。
和子　開けてみて。
はるか　（袋を開けて、人形を取り出す）……人形。
和子　貸して。（と、人形に手を入れて動かしながら）こんにちはぁ。
はるか　あー。
和子　はるかちゃん。ボク、星の王子さま。
はるか　王子さま。どう見てもネズミやけど。日本語しゃべってるしぃ。
和子　ミッキーマウスのパチもんやないよぉ。
はるか　パチもんや。
和子　これ、商店街で売ってるやつ。昔からあってな。清子とこれでよう遊んでん。
はるか　名前、なんにする。（と、人形をはるかに手渡す）
和子　（人形を受け取る）名前。
はるか　ミッキーもあかんやろ。パチもんちゃうからな。……トムとジェリーのジェリーとかは。知ってる。
和子　知ってますけど。ジェリーって感じじゃない。
はるか　そうか。
和子　チュー吉。
はるか　はるかちゃん、ベタやな。
和子　え、あかん。
はるか　いいよ。チュー吉で。（人形の頭を撫でながら）はるかちゃんのこと、よろしくねぇ。よう聞いてあげてや。……チュー吉やったら、なんでも言えるやろ。
はるか　……。
和子　ウチも、堕ろしたことあるよ。
はるか　え。
和子　二回ぐらい。
はるか　……。
和子　嘘。
はるか　え。
和子　ひっかかったぁ。
はるか　あー。
和子　仕返し。びっくりした。
はるか　ちょっと。

5

孝美、二階から店に入ってくる。ボストンバッグを持っている。

和子　換えてくれたぁ。
孝美　うん。ついでに、シーツも換えたから。
和子　ありがとう。
孝美　まだ興奮してる。
和子　うん。
孝美　……和ちゃん、たこ焼き器、使う。
和子　使えへんよ。
孝美　ほんま。
和子　あんただけやん、あれ、使っとったん。
孝美　うん。

孝美、台所に向かうが、戻ってくる。

孝美　和ちゃんにあげるわ。
和子　あ、そう。ありがとう。
孝美　現金、あの小口の。棚の三番目に入ってるから。
和子　はーい。
孝美　ヤマモトの、クリーニング。おばちゃんが明日持ってくるから。
和子　わかった。
孝美　アンブラッセの、パンのチケット、冷蔵庫に貼り付けてる。
和子　知ってる。
孝美　地デジのパンフレット。テレビの下にあるから。
和子　ありがとう。後で見るわ。

孝美　聞けへんの。
和子　なにが。
孝美　どこ行くか。
和子　……はやし、やろ。
孝美　……はるかちゃん、元気でな。
はるか　はい。
孝美　東京で、がんばって。
はるか　行くかどうか、まだわかりません。
孝美　行けるんやったら、行ったほうがいいよ。
はるか　……。
孝美　ほんな。和ちゃん。
和子　気ぃつけてな。
孝美　はい。

孝美、外に出ていく。
はるか、手につけた人形を動かしている。
和子、ぼーっとしている。

はるか　カレーしようかって。さっき、孝美さんが言うてました。
和子　……暑いときに、辛いカレー。ええなぁ。
はるか　お肉、どっちなんですか。牛か豚。
和子　うちは、お肉入れへん。昔から野菜だけ。
はるか　……そうなんですか。
和子　東京、行かへんの。
はるか　……。
和子　ここにおってええよ。昨日、はるかちゃんが寝た部屋、もともと清子の部屋やってん。空いてるから。
はるか　……おじさんが。
和子　あのゴリラはなんとでもなる。
はるか　……。
和子　高校も、こっから行けるし。その代わり、バイトはしてもらわなあかんけどな。するやんな、バイトぐらい。
はるか　はい。
和子　大学にも行ったらええし。お父さん、頭よかってんから。お兄ちゃん反対しても、ウチが行かしたる。
はるか　お父さんのこと、知ってるんですか。
和子　二回、会うただけやけど。すごい優しい人やったわ。
はるか　二回だけ。
和子　一回めは、つき合うてるて、ここに言いに来たとき。二回めは、清子を迎えに来たとき。
はるか　迎えに来たんですか。
和子　昆虫みたいな人やったな。
はるか　……カマキリ。
和子　そうそう。カマキリっぽい顔してるよな。ウチは好きやけどな、ああいう顔。
はるか　清子もそこに惚れたんかな。
和子　お母さんは、お父さんは、本の虫やて、言うてました。
はるか　うまいこと言うわ。……無理に言わんけど。また、いつでも来てええし。
はるか　（人形を動かす）
和子　わかったぁ、チュー吉くん。
はるか　はいっ。（と、人形を動かす）
和子　意外とかわいいな、これ。
はるか　はい。

昭子、二階から店に入ってくる。小さな太鼓を持っている。

和子　なに持ってきてんの。
昭子　……ハナコの、太鼓。
和子　太鼓な、わかった。……おばあちゃん。ちょっとおかしいから。
はるか　……はい。その太鼓をずっと鳴らしてたんですか。
和子　そう。
昭子　ハナコの、太鼓。
和子　はいはいハナコな。知ってるよ。
昭子　ハナコ、ご飯。食べる。
和子　ハナコは食べへんよ。お腹すいたん、お母ちゃん。もう、ちょっと待ってな。
昭子　……ハナコ。（と、はるかを見る）
はるか　はじめまして。はるかです。（と、人形を手から外す）
昭子　ハナコを、食べた。
和子　食べてないよ、ハナコ。これやろ、ハナコは。

はるか　……私、清子の娘です。おばあちゃんの孫です。
昭子　（はるかに反応せずに黙っている）
和子　ごめんな。たぶん、わかってないと思うわ。
はるか　……おばあちゃんに、聞きたいことあったんです。聞いていいですか。
昭子　……。
はるか　お父さんとお母さんの結婚、なんで反対したんですか。……お母さんのこと、なんで追い出したんですか。お母さんのこと、嫌いやったんですか。
和子　嫌いなわけないよ。
はるか　……。
和子　なあ、お母ちゃん。清子のこと、心配しとってんな。……ずっと、清子が元気でいてますようにて、今宮戎にお百度参り、何回もしたな。今宮戎て、商売繁盛の神さんやから意味ないねんけどな。お母ちゃんもアホやろ。
はるか　……はあ。
和子　ずっと、心配してたよなぁ。
はるか　お母さんは、二度と戻りたくないって言うてました。お母さんから、そういう話しか聞いてないんです。ほんまは違うとか、事実はどうやったとか、全然、わからないんです。
和子　清子とはるかちゃんのお父さんが結婚したら、不幸になるて思うとったから、反対したんや。
はるか　なんで不幸なんですか。
和子　おばあちゃんも同じやったから。
はるか　どういうことですか。
和子　おばあちゃんは新田の娘でな。ウチらのお父さんが養子に来てん。お父さん、すごい苦労してな。商売の苦労だけちゃうし。納骨、見たやろ。墓もない、こんな家に来て。好きで来てもうたらしいけど。おばあちゃん、後悔したやろな。
はるか　結婚て、お互いに同意、というか、好きやからするんですよね。
和子　おじいちゃん、お医者の家の人でな。お金ない人らに、ちゃんと医療を受けさせたいて、よそから来た人なんや。
はるか　おじいちゃんは、よそから。
和子　こっち来たんは、もうちょっと。何代か前やってんやろけど。
はるか　はい。え、だから。
和子　そんな立派な人が、ここに馴染むわけないんや。ほんまは医者になりたかったやろうし。おばあちゃんのために、あきらめたんやろ。
はるか　……。
和子　子供にはそんな思いさせたないて。清子が、どんだけ好きて言うても、あかんて言うた。お父さんは、京都の大学生やったしな。いいお家で、頭もいい、将来もある人や。そんな人と清子が、うまくいくはずないて。ずっと反対してた。
はるか　そんな、いつの時代の話ですか。
和子　今やで。あるんよ、わけのわからん話が。……清子のお腹に、赤ちゃんできたとき。はるかちゃん違う、水子さんな。……おばあちゃんは、堕ろさせようとした。橋村、そこあるやろ。昔、産婦人科やってて。あそこに連れて行こうとした。……ひどいと思う、さすがにウチも止めたわ。子供できてんやったら、許してあげたらええのにて。そやけど、お母ちゃんは、無理やり連れて行こうとした。そやから、清子は逃げた。……水子さん殺したんは、ウチらや。
はるか　それは、関係ないと思いますけど。
和子　これが事実や。清子が生きてたら、絶対、帰ってけえへんやろなぁ。
喜一郎、外から店に入ってくる。セカンドバッグをテーブルに置く。
和子　……おかえり。銀行、どやった。
喜一郎　とりあえず、期限延ばしてもうた。
和子　いつまで延ばせんのやろな。
喜一郎　なんや、こんなもん持ってきて。（と、昭子の太鼓を取ろうとする）
昭子　（太鼓をつかんで離さない）ハナコや、あかんっ。……ウチのハナコ。
喜一郎　マシなったんか。
和子　さっきよりは。
喜一郎　孝美は。
和子　はやし、行った。
喜一郎　俺が行くのに。行かすなや。
和子　お兄ちゃん、過保護すぎたんやね。
喜一郎　腹の中におんのにから。
和子　お兄ちゃんに似てるかなぁ。……須賀くんに似てたりして。
喜一郎　……。
和子　知ってたんやろ。
喜一郎　……行ったんか。あいつら、どこ行った。
和子　さあ。
喜一郎　（和子を殴り、さらに殴ろうとする）

はるか　（和子をかばう）
喜一郎　……おまえ、黙っとったんか。
和子　行かしたったらええやん。幸せになれるんやったら。……出ていきたいやつは、みんな出ていったらええねん。お兄ちゃんも、ずっと我慢してるだけやろ。
喜一郎　おまえに言われる筋合いないわ。人にさんざん迷惑かけやがって。色きちがいが。
和子　ゴリラに言われたないわ。
喜一郎　……どうでもええわ。

喜一郎、外に出ていこうとする。

和子　ほっといたりいや。
喜一郎　だれが追いかけるか。……斎場の、大穴、入りたいわ。
和子　なに言うてんの。
喜一郎　はるかちゃん。
はるか　はい。
喜一郎　お父さん来たら、お金、融通してくれへんかなぁ。ちょっとでええねんけど。

喜一郎、歩き出す。
和子、喜一郎の背中に向かって、セカンドバッグを投げつける。
喜一郎、外に出ていく。

和子　情けない、お兄ちゃんや。
はるか　大丈夫ですか。
和子　あれぐらいではまだ死なんて。
昭子　……許してください。ハナコを……許してください。
はるか　ハナコて。
和子　昔飼ってた牛。なんか、ようわからん牛の物語作って。ずっとしゃべってんねん。
昭子　目を突かれて……許してください。
和子　お母ちゃん、今日はよう話したなぁ。疲れたやろ。上で、ちょっと横なっとこか。
はるか　ここに、いてたら、あかんのですか。
和子　え。
はるか　いっつも上って。なんか監視されて、仲間外れされてるみたいじゃないですか。
和子　お兄ちゃんが、店に出てきたら、嫌がるからなぁ。
はるか　あぁ。
和子　もう店、やめるかもしれんし。ええか、ここにおっても。
はるか　はい。
和子　お母ちゃん、ここにおってええよ。その代わり、勝手に外出たらあかんで。後で、長橋公園つれて行ってあげるからな。
はるか　……私、ご飯、準備します。
和子　あ、ええよ。そろそろ迎えにきはるんちゃうの。
はるか　野菜カレーでいいですか。おばあちゃんにも、いっぱい食べてもらわんと。
和子　……そうやな。お願い。
はるか　はい。（と、スーパーの袋を持つ）
和子　台所は適当に。
はるか　はい、適当にします。
和子　カレー、うちはカレー粉やから。調味料の、茶色の瓶に入ってるから。
はるか　はい。

はるか、台所に入っていく。
和子、はるかの後ろ姿を見つめている。テーブルの上の人形を手に取り、動かす。

和子　……ただいまぁ。（と、昭子に向かって言う）……帰ってきたでぇ。
清子や。
昭子　……。
和子　娘のはるかも帰ってきたでぇ。……長いこと、待たせたなぁ。
昭子　（人形に手を触れる）
和子　ただいまぁ、お母ちゃん。
昭子　……。

和子、人形を動かしている。
昭子、人形を見ている。
終